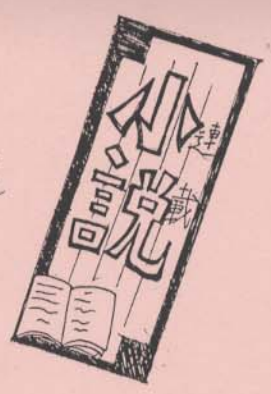


君のために（第三回）

連

……

あの後、学校を後にして向かった先は二人の思い出の場所。俺たちが住んでいるマンションの非常階段。普段は利用者がいなく、人目に付かない絶好の遊び場だった。

一階から一気に駆け上がり四階へさしかかろうとした時、階段に丸くなって座っている樹里がいた。

「やっと…見つけた…」

俺ニ必要ナ人…

「明…？」

俯いていた樹里が顔を上げた。

「明、凄い汗！」

「それより何だよこの置手紙…。」

ポケットにしまってあった置手紙を樹里に見せ付ける。

「私…知らないよ？」

「はぁ？じゃあ何でこんな所に…」

「私は考え事する時はいつも此処でするの。…明は何で私を探してたの？」

「何でって…」

足リナカッタカラ？違ウ…

「樹里が…」

必要ダッタカラ。…何故？

「あ…」

「明？顔…赤いよ？」

自分の中から出てきた答えに思わず頬を染める。こんなこと始めから分っていたのに…

「樹里だったら…樹里が今の俺の立場だったら何を探す？誰が書いたのも分らないメモだけを手がかりに。」

樹里は考え込みだしたと思うと口を開いた。

「私だったら…明…かな…」

「何で？」

「…分んないけど…最初に浮かんだのが明だった。」

その言葉を聞いた瞬間、顔がにやけてしまう。

「俺さ、樹里を探している時分かったんだ…今探しているモノは俺が一番必要に思っているモノ…俺が一番求めているモノなんだって…」

「それって…」

俺は樹里の腕を引っ張り自分の腕の中へ包み込む。

「あッ…明！」

「俺には樹里が必要だ…ずっと傍にいてほしい。」

「…わたしも…明が必要だよ…」

そういうと俺の背中に腕が回ってくる。

「これで約束果せそうだな…」

「覚えてたの？」

「忘れてたらこんな所に来ないって。」

幼い頃の約束

心のどこかでは叶う事を願っていたのかも…なんてな。

おまけ

結局、このお騒がせな出来事は全て見るに見かねた拓真の仕業だった…。

（完）

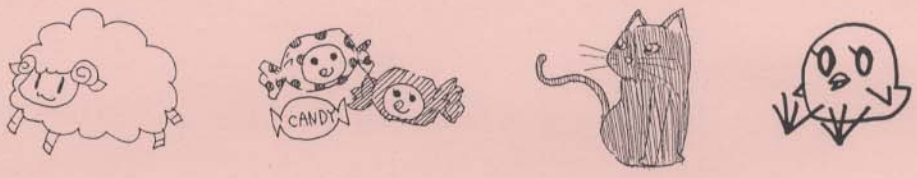
心理ゲームの結果

被害妄想が強いかどうかわかるよ！

aを選んだ人は被害妄想のカケラもありません。健全な精神の持ち主です。そのため、ナーバスな人の気持ちを理解する心が欠けがちかも。

bを選んだあなたは、かなり被害妄想が強いタイプ。ちょっとでもそっけなくされると「私ってきらわれてる」と思ってしまうみたい。もっと気をラクにもって。

cを選んだ人はふだんは平気なんだけど、心が元気じゃないときだけ被害妄想におちいるみたい。



楽器紹介コーナー

木管楽器　編

フルート、クラリネット、サックスなど・・・これは、リコーダーとはまったく違います。今回は、リコーダーとの違いにスポットをあてながらクラリネットについて紹介します。

まずは、色から・・・リコーダーは茶色ですね？デモ！クラリネットは黒色なんです！これだけではありません！太さや、穴などもリコーダーとはまったく違うんです！
今日は色だけを紹介しました。
それでは！また次回詳しくご説明します！

さくら（読み切り）

Charlie

桜、咲いたら一年生なんて誰が決めたんだろう。どう見たって桜散ったら一年生だと思う。

「早くしなさい、遅刻するわよ。」

「あと少しだってば。」

リビングにいる母親に怒鳴るように返事をした。

今日から新しい毎日が始まる。三年間通いつめた中学校を卒業し、高校生になって始めての登校日。さっきから私は洗面所でねぐせを直すのに格闘していた。新しい学校生活が始まるっていうのに私の髪の毛は強情でいうことをきいてくれない。

「はあ。」

鏡を見てためいきをついた。あんなに楽しみで楽しみでたまらなかった高校生活も、日が近づくにつれ不安でしょうがなくなってきた。人見知りの激しい私が新しい環境の中ついていけるか・・・先が見えない未来を考えながらアイロンで必死にねぐせを伸ばす。だけどすぐにピンとはねてもとに戻ってしまった。

「もう学校休んじゃおうかな。」

ふとそんな考えがよぎった。しかし入学初日から休むなんてますますクラスの輪に入れない。

もう一回深いため息をつく。仕方なくゴムで髪の毛をひとまとめにし、おぼつかない手つきでネクタイをしめると廊下を走って玄関へ急いだ。

「入学式から遅刻なんて嫌よ。」

と玄関ですでに準備しスーツで立っている母が言った。

「ごめん。」

暗く狭い玄関で新品のローファーを履く。大きめの物を買ったせいか靴の中はゆとりがあった。

重い玄関の戸を開けるといっきに光が射し込む。すると、桜の花びらが一枚足元にひらりと落ちた。外にある桜は殆ど散って青い葉が顔をだしていた。風が吹くたび花びらが舞い桜吹雪がおこる。それが私の門出を祝うようなそんなふうに映った。

「ほら、早くしなさい。」

とせかされて足早に歩き出した。

ふりかえって見るとこれから始まる新しい日々に、頑張れと手をふっているような、そんなふうに桜は舞っていた。

亜佐美　第五話

連

しかし、私の考えていた恐ろしい出来事は、起こる気配さえもなかった。

「では、改めて紹介します。北海道から転校してきた、茂木京子さんです。みんな、仲良くしましょうね。」

担任の先生は、定年間近の女の先生で、優しい目をしていた。

「はーいっ！」

クラスのみんなも、そんな先生のことが大好きらしい。休み時間になると、とくに女の子達が、いっせいに私を囲んだ。亜佐美ちゃんも含まれている。

「北海道のシチューって、東京とは違うの？」

「北海道と沖縄の気温を足して二で割ったら、東京かな」

「カニいっぱい食べれるの？」

「雪だるまつくるの得意？」

「京子ちゃん、北海道にいたのに冷え性じゃないんだ！いいなー。」

みんな、そろいもそろって面白い質問ばかりしてくる。最初は緊張したけれど、段々慣れて…というより、面白くなってきて、スラスラと返事が返せるようになった。

そのうち、私に質問を投げかけてくる女の子の一人が言った。

「自己紹介してなかったね。私は山口サエコ。サエって呼んでね。」

サエちゃんはあか抜けていて、とても可愛い顔をしていた。

「このクラスにはね、面白い人ばっかりいるんだよ。毎日爆笑！そう、例えば女の子だとね…」

その子の名前を言おうとした、その時だった。

「ちょっと！」

物凄く大きな声が、ただでさえうるさい教室に響いた。

私はびっくりして声のする方を向いた。

「…！？」

そこには、まるで肝っ玉母さんみたいな、体格のいい女の子が、でんと立っている。

「そう、あの子だよ」

サエちゃんは私に、というより自分に、そう呟いた。

その子は私の所へ　真直ぐ、大股に歩いてきた。

「ちょっと」

目の前で止まり、私の目を、しっかりと見て言った。

「あんたが京子ちゃんだよね」

それは見た目通りの、あまりにも唐突ではっきりした口調だった。私はしっかり頷いた。

「あたし、美華。大道寺美華」

（すごい名前だ）

私は心の底からそう思った。

「よろしくね！」

美華ちゃんは仏頂面のまま、大きくてがっちりした手を、物凄い勢いで差し出してきた。

私がよれよれと手を差し出すと、その手をがっしりと掴んだ。

暖かくて優しい手だ、と思った。

「…クスクスッ、ハハッ、ハハハハッ！」

その瞬間、その様子を眺めていた亜佐美ちゃん達が、いっせいに笑い出した。

（続く）

へんしゅうこうきによる

今回も楽しくできました。タイトルもかわってリニューアルにしたのかなと思います。もう見かも高うで早いし、実感わきませんが受験もがんばります。新聞もつくれたらなあ…

約七ヶ月ぶりの参加になりました！楽しかったです！

2回目でクイズをやりました。たのしかったです。

今回の新聞作りには少ししか参加できなかったので次がんばります

今回は小説がなんとか完成しました。個人的には、もっと少し深い内容にしたかったと思います。イラストは私の萌要素を詰め込んだイラストとなっています。次回も楽しくできたら良いですよね。

連

今日は新コーナーをやりたくてうずうずしてました。デーース

受験が終わってクラブリの参加です。これからまた一年がんばろうと思います。

受験も無事終わり久しぶりにゆっくり参加できました。今回紹介したマンガは連載が終わってしまいましたがずっと愛してます！！

R

また仕事がたまりまくってしまった。ちゃりィです。小説がおわらん。おわらん。私も今年で高3です。青春時代がおわってしまいます(泣)もッリィ

久しぶりに参加しました。心理ゲーム出来て良かったです。きっとこれからも参加するッ!!

K